



絆

特集 鹿児島県と岐阜県、姉妹県盟約締結から50年 薩摩義士がつないだ

昭和46(1971)年7月27日、鹿児島県と岐阜県は姉妹県盟約を結びました。それから半世紀。両県は活発に交流し、絆を深め続けています。その縁をつないだのは薩摩義士でした。



鹿児島市の城山の麓にある薩摩義士碑。平田鞆負を頂点に80余名の殉死者の供養塔が並んでいる。大正9(1920)年に建立。

歴史に埋もれた偉業 岐阜で語り継がれる

薩摩義士とは、宝暦4(1754)年から翌年にかけて、木曾三川の治水工事(宝暦治水)に殉じた薩摩の武士たちのことです。

岐阜県海津市・羽島市・三重県桑名市・愛知県愛西市にまたがる一帯。ここは、木曾川・長良川・揖斐川の3つの流れが集まり、頻繁に洪水が発生していました。薩摩藩は、幕府からこの難工事を命ぜられ、水害に苦しむ人々を救いました。

しかし、この宝暦治水は、薩摩藩では犠牲が大きかったこともあり、触れてはいけないこととして扱われ、一般に知られることはありませんでした。

この偉業を成し遂げた薩摩の武士たちに光が当てられたのは、明治時代になってから。木曾三川の現地で薩摩義士の顕彰活動が活発になり、その後、大正時代になってから鹿児島にも波及し、その功績がたたえられるようになったのです。

この宝暦治水を縁として、昭和46(1971)年、鹿児島県と岐阜県は全国初の姉妹県盟約を締結。以来、両県は青少年交流や市町村・経済団体による交流など、半世紀にわたり交友関係を深めてきました。先人が築いた両県の絆は、時代を超えて今も脈々と受け継がれています。

突き付けられた 幕府からの無理難題

宝暦3(1753)年12月、幕府から薩摩藩主・島津重年に木曾三川河川工事の御手伝普請が命じられました。御手伝普請というのは、幕府の指揮下で土木作業に従事し、ほぼ全ての費用の負担を強いられるものでした。これには大名の弱体化を図る目的もありました。



【逆川洗堰締切工事】木曾川から長良川に一気に流れ込み、氾濫しやすい場所であった。洗堰は長さ18m、高さ3m。
【大樽川洗堰締切工事】増水時に長良川から大樽川に流れ込む水量を抑える目的で築かれた。別名「薩摩堰」。
【油島締切工事】堤の長さは約1km。舟に石を積んで運び、舟ごと沈める、ということを繰り返して造られた。



現在の木曾三川
右から木曾川、長良川、揖斐川

苦境を乗り越えて 難工事をやりとげる

当時、藩には66万両(藩の収入の3年分ほど)の借金があり、財政は逼迫。大工事を請けるには非常に厳しい状況でしたが、断ることは許されません。命に逆らえば藩は取りつぶされます。藩内では議論が紛糾。「従わずに、幕府と戦おう」といった意見も出ました。そんな中、家老の平田鞆負(平田正輔)は「苦しんでいる人を助けるのも薩摩武士の本分」と藩家老たちを説得。藩論をまとめ、工事を引き受けることにしました。

宝暦4(1754)年2月、平田鞆負を総奉行として治水工事が始まりました。薩摩からだけでなく江戸詰めも動員され、約1000人が工事に従事しました。

自然の猛威を相手に、工事は容易ではありません。作業中に洪水が起ることもありました。さらに、幕府からも無理な仕打ちを受けます。割高な資材を使われたり、工事のやり直しが指示されたり、粗末な宿舎と食事しか許されなかったり……。工事中の事故死や病死、そして幕府に抗議して自害する者もあつて犠牲者が相次ぎます。最終的には80名以上の殉死者を出しました。



千本松原(岐阜県海津市)
揖斐川と長良川の間
に築かれた油島締切
堤。薩摩藩が植樹した
松並木は「千本松原」と呼ばれている。



千本松原には「宝暦治水之碑」もある。明治33(1900)年に建立。



治水神社(岐阜県海津市)
平田鞆負と宝暦治水殉死者がまつられている。有志により昭和2(1927)年に着工、昭和13(1938)年に鎮座。

当初、幕府からは「予算は多くて15万両ほど」と伝えられていました。しかし、工事計画の変更などもあり、最終的には40万両にもなりました。平田鞆負は資金調達に奔走し、大坂の商人たちに頭を下げてなんとか資金をつくりました。宝暦5(1755)年3月、全ての工事が完了。平田鞆負は国元へ最後の報告をしたあと、5月25日に死去しました。大きな犠牲を払ったことに責任をとって自害した、とも言われています。